



私の写真館
My Photo Studio
アルバムの中に 204

初代陸上自衛隊特殊作戦群長
明治神宮武道場「至誠館」館長

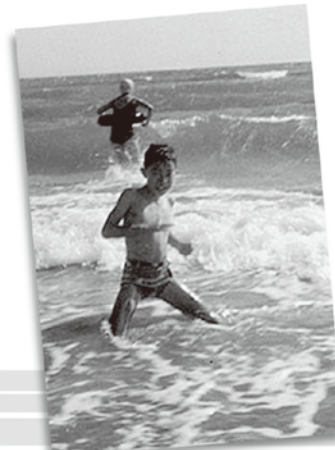
荒谷 卓

▶秋田県立大館鳳鳴高校時代の文化祭で(左端)。バカをするのも好きだった

▼(右端から)長女的美千代、長男の健道、次男の武日佐の3人の子供に恵まれた



▼陸自入隊後間もなく結婚。妻の智子は小中学校の同級生



▲父の昭三(83)(右)と母のキクエ(81)(中)。母は私を産む前、「日の丸が振られるなかを、歯を食いしばるようにして走る息子」を夢で見たという

▲左:正義のヒーローごっこに夢中だった

▶祖父の吉次郎(後列左から2人目)と祖母のユミ(中列右から2人目)。子供のころ、2人から聞かされた戦前の話が私の原点となった



武士道の特殊部隊

陸上自衛隊初の特殊部隊として平成十六年に創設された「特殊作戦群」には計画段階から携わった。非常に厳しい選抜を経た隊員たちに群長としてまず求めたのは、「正しいと信ずることのために生死を問わず行動する」精神だった。

警察官や海上保安官同様、危険と向き合う自衛官には、他者の安全確保と正義のために自己犠牲の覚悟が求められるはずである。「いざという時に引き金を引く覚悟も必要だ。どこの国の軍隊もそのための精神的な支えや哲学を教育する。しかし戦後という、ある意味歪な社会で政治的に「存在すること」だけを期待された自衛隊では、「死」に直面する訓練は行われてこなかった。

それでも「テロとの戦い」に参加し、決死の覚悟の政治的・宗教的テロリストと戦うには、彼ら以上の正義と覚悟が必要となる。私は次の四項目を部隊の精神規範とした。

「確たる精神的規範(正義、信念)

を有し生死の別を問わず事に当る肚決めをすること」「臆せず行動できる勇氣(気概)とこれを維持する氣力(胆力)を鍛錬すること」「事を成し遂げる実力(知力、技術、体力)を修養すること」「言動を一致させ信義を貫くこと」

「特殊作戦群の武士道」である。近代国家の軍隊は、その国の徳操(公共心)の象徴でもある。武士道を選んだのは、自衛官は日本の核心的伝統を継承しながら日本を守るべきであり、単に領土や経済的利益を守ると考えるよりもはるかに重要なことだからだ。武士道は、いまでも特殊作戦群に受け継がれている。

私の写真館
My Photo Studio

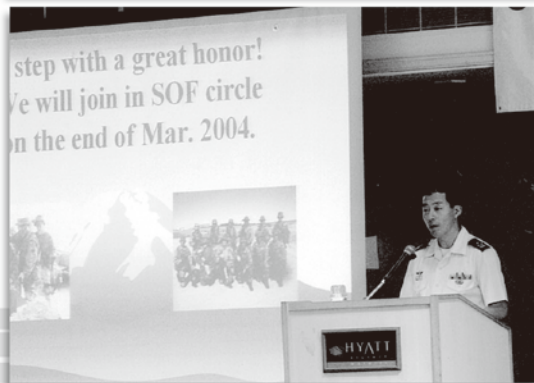


私の写真館

My Photo Studio



▶「グリーン・ベレー」で臨んだ米国特殊作戦学校の卒業式。入学時に41歳だった私は、30歳までの兵士が集まるなかで異色だったが、他の外国人留学生が全員脱落したサバイバル訓練はじめ厳しいトレーニングをクリアし続けると、敬意を払ってもらえるようになった



▲陸自が復興業務支援隊として赴いたイラクには、特殊作戦群も要人警護や部隊警備に派遣された

◀環太平洋諸国の特殊部隊(SOF)指揮官らが集まったシンポジウムで講演(2004年)



▲陸自の幹部候補生学校での訓練。陸自ではレンジャー資格も取得した

◀特殊作戦群創設のために平成14~15年に留学した米国特殊作戦学校(通称グリーン・ベレーQコース)での自主トレ。米軍の精神規範は「私は決して敗北を受け入れない」などとする「戦士の精神」が有名だが、特殊部隊「グリーン・ベレー」は日本の武士道も研究していた

▼平成7~8年にドイツの連邦軍指揮大学に留学。特殊部隊の世界に入るきっかけとなった。東西冷戦終結を受けたNATO諸国の安全保障戦略の見直しで重視され始めたのが、特殊部隊。紛争地での秩序維持から民生支援、各種工作活動まで幅広い能力が求められた





▶葦津珍彦先生をはじめ田中茂穂・初代館長(右から2人目)、稲葉稔・第2代館長(右端)ら至誠館の先生方からは、武術だけでなく「正しい日本の姿」を教わった



あらや・たかし
昭和34(1959)年、秋田県生まれ。東京理科大学工学部卒業。昭和57年陸上自衛隊入隊。平成16、19年、初代特殊作戦群群長。20年、1等陸佐で退職。同年、明治神宮奉職、21年より至誠館第3代館長。「予備役ブルーリボンの会」顧問。国際安全保障学会員。著書に「戦う者たちへ」(並木書房)。



▲稽古を積むうちに、丹田(たんでん)を張って座ることが可能となった。大人の力で押されても動かない

▶実戦向きの鹿島神流の立ち合いでは、二刀流も真剣も使う。真剣稽古では、「いかに恐怖心を克服するか」が重要となる



正しい日本を取り戻す

館長を奉職する明治神宮の至誠館には大学時代に通い始め、そこでの出会いが私の進路を決めた。学習院中等科で皇太子殿下にも日本史を教授された島田和繁先生は終戦後、GHQの統制に反して校内に国旗を掲揚したという逸話の持ち主で、初めて会うなり、「お前は、軍人の顔つきをしている。自衛隊に入れ」と言われた。その雰囲気は圧倒されたまま、内定していた大手ゼネコンへの入社を断って、陸上自衛隊に入った。

至誠館は、戦後神道界の重鎮だった葦津珍彦先生が「国士」の育成を目的に創立された武道場である。私が門人に教える鹿島神流は、剣を使わない格闘術も取り入れた実戦的な剣術だが、その鹿島神流をはじめ日本武術の特長は「入り身」にある。安全な間合いで戦うのではなく、進んで相手の間合いに入り込み、「必殺」の一撃を加える。そこで必要なのは「捨て身」の精神である。生死に

執着しない心情であれば、体もリラックスしたまま無駄なく必殺の間合いに入り込める。この「入り身」こそ武士道の象徴であり、大義や信念のためには肉体の生死は気にかけないという犠牲的精神なくしては習得できないと考えている。

しかし戦後のわが国では、自己の欲求や利益の充足が最優先され、「戦うことも辞さない正義心を持った生き方」は占領憲法によって葬られてしまった。たとえば北朝鮮によって拉致された同胞救出に何ら手を打てないことが、そのことをよく示している。日本が、正しい日本の姿を取り戻すために生きるといふ私の目標は、まだ道半ばである。

私の写真館 My Photo Studio



構成 / 小島 新一
レイアウト / 株式会社オーバル